

平成23年度東京都写真美術館自主企画展

芸術写真の精華

日本のピクトリアリズム 珠玉の名品展

Masterpieces of Japanese Pictorial Photography

平成23年3月8日(火)～5月8日(日)

東京都写真美術館3階展示室



黒川翠山「題不詳」1906年頃
東京都写真美術館蔵

主催 公益財団法人東京都歴史文化財団

東京都写真美術館

助成 財団法人朝日新聞文化財団

協賛 資生堂／凸版印刷／東京都写真美術館支援会員

<展覧会概要>

写真術は、発明された当初からその芸術性が模索され、19世紀後半には絵画を模倣することによって芸術性を確立しようとする「ピクトリアリズム（絵画主義）」が成立しました。日本でも明治時代中頃から、撮影技術の革新によって登場するアマチュア写真家たちが西欧の動向を取り込みながら“芸術”としての写真のあり方を模索しはじめます。その模索は、日本の伝統的な絵画と、受容したばかりの西洋絵画の両方を規範として、日本独自のピクトリアリズムの写真表現をかたちづくります。

大正時代に入ると、ゴム印画やブROMオイル印画といったピグメント印画法を駆使した作品や、ソフト・フォーカスの表現をもつ作品が数多く生み出されました。手工芸的なプリントワークを高度に駆使した一品制作の作品は、あるときはデリケートで精緻に、またあるときは豪放磊落（ごうほうらいらく）でユニークな表現を展開して、ピクトリアリズムを標榜する芸術写真として大きな潮流をつくります。この芸術写真は、写真の純粋性を追求する近代的写真が確立した時代、昭和のモダニズムの中にあって形を変えながら受け継がれてゆきます。

本展では、明治時代後半から1930年代までに制作された世界に誇りうる珠玉の名品約120点と貴重な資料を一堂に集め、日本独自のピクトリアリズムの表現の精華を堪能していただけます。そこには近代化の中で獲得した日本人の感情がいかに変容し、いかに変容しなかったかの軌跡が浮かび上がってくるでしょう。

<本展の見どころ>



高山正隆「楽器を持つ女」1924年 東京都写真美術館寄託

「日本のピクトリアリズム」 珠玉の名品を一挙公開！

明治中頃から大正時代、日本の伝統と西欧の文化を巧みに受け入れ、日本人ならではの美意識によって、日本人写真家だけが成し得た独自の世界、日本のピクトリアリズム（絵画主義）。年代を追って次々とご紹介する名品の数々は、日本が世界に誇る芸術写真の真髄です。

一点一点の作品解説から

時代背景と表現の模索を知る

この展覧会に出品される作品には、一点一点に作品解説が添えられています。明治から大正という時代が、写真においてどのような時代だったのか、また美術全体においてどのような時代だったのかを理解しながら、日本人写真家の表現の模索をご紹介します。

古典技法「ピグメント印画法」。

匠の技の結晶が生んだ

超絵画の美しさ。

顔料を使い画像をつくる写真の古典技法「ピグメント印画法」。特に日本人写真家によるブロムオイル印画は世界に類を見ない超絵画の美しさです。一点の美しさを追い求めた匠の技をご堪能ください。

<展示作品および資料>

●写真作品（約120点）

黒川翠山、野島康三、小野隆太郎、吉野誠、日高長太郎、堺時雄、福森白洋、安井仲治、大久保好六、福原信三、福原路草、島村逢紅、梅阪鶯里、河野龍太郎、高山正隆、塩谷定好、廣井昇、小関庄太郎、田村榮、山本牧彦、岩佐保雄、有馬光城 ほか

●資料（約20点）

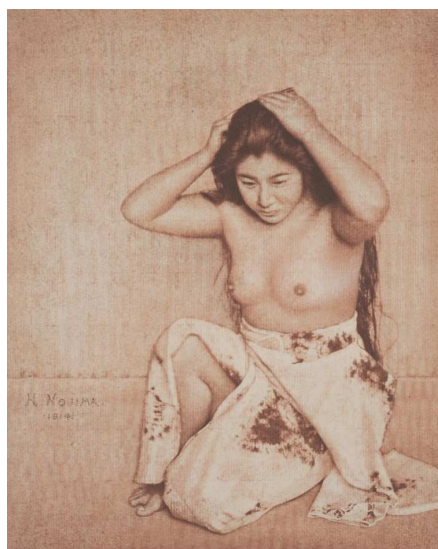
『写真例題集』『白陽』『銀の壺』などの芸術写真雑誌
『湖北印画法』飯田湖北、『天弓画集』などの写真集 ほか

主な出品作家解説

野島康三(のじま やすぞう)

1889（明治22）-1964（昭和39）

埼玉県浦和市生まれ。1906年、慶應義塾普通部在学中に写真を始めるが、病気で中退。10年に東京写真研究会に入会し、写真家としての頭角を現す。15（大正4）年、日本橋人形町に三笠写真館を開設。その後、作家活動を続けながら、19年に神田神保町に兜屋画堂を開設し、新進気鋭の洋画家たちの作品を紹介する。兜屋画堂を2年で閉鎖した後は、自宅サロンを開放し、岸田劉生、萬鉄五郎、梅原龍三郎らの展覧会を開いている。20年、九段下に野々宮写真館を開設。同年、第10回研展の会場内で、初期の代表作による「個展」を開催。この時の作品は、ピグメント印画法による重厚なマチエールを持つ絵画的な写真であった。しかし、その作風は30（昭和5）年頃に紹介されたヨーロッパ写真の影響を受け、瞬間的な感覚で捉えた実験的な作風へと大きく転換する。新興写真の台頭は、日本の写真家や評論家の意識を根底から揺るがした。そして、32年、中村岩太、木村伊兵衛と共に写真雑誌『光画』を創刊。野島は、人物を対象とした即物的な一連の「女」の作品を連載する。33年、原弘の展示構成により個展「女の顔・20点」を銀座・紀伊國屋で開催。『光画』の休刊以降は軍事色が強くなり、制作活動の意欲が薄れる。39年、福原信三と共に国画会に写真部を創設、戦後も出品を続けた。



野島康三「髪梳く女」1914年
京都国立近代美術館蔵

日高長太郎(ひだか ちょうたろう)

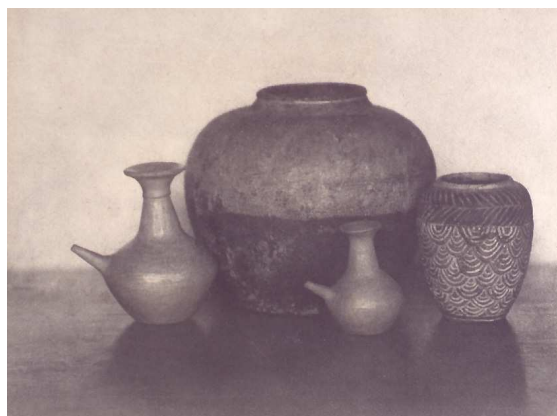
1883（明治16）-1926（大正15）

愛知県生まれ。17歳の時に写真をはじめる。1912年、佐野紫影らと「愛友写真倶楽部」を結成。14年に「斜陽」を発表した後、「表現の極致はゴムにあり」と言い切り、山岳風景などを題材に重厚なゴム印画の作品を次々と発表し、大正時代におけるピクトリアリズムの風景表現をリードして多くの写真家に影響を与えた。豪放磊落な表現は、自然をリアルに見つめることを基調とする観照的な態度が貫かれている。

福森白洋(ふくもり はくよう)

1887（明治20）-1942（昭和17）

高知県生まれ、本名、憲一。県立高知商業を卒業後、大阪商船に見習いとして入社。1907年宇治川電機会社に就職し、発電所建設に従事。17年にカメラを買い写真をはじめ、浪華写真倶楽部に入会し、ブロムオイルによる風景写真を制作する。22年、米谷紅浪、梶原啓文らと「天弓会」の設立に参画し、活発な活動を展開する。30年コダック・ジャパンに入社し、実作者としてよりは、指導者として写真雑誌への寄稿や講演などで活躍する。

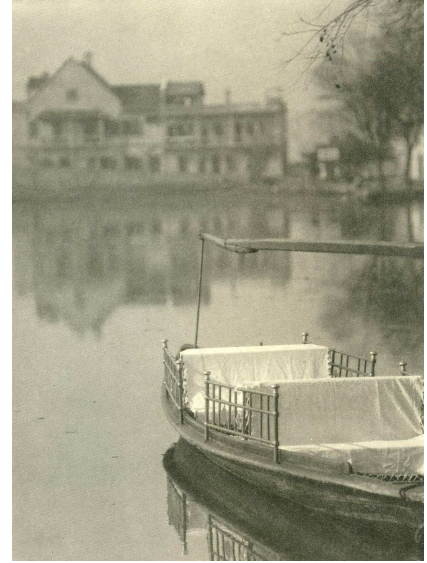


福森白洋「静物」1926年 東京都写真美術館寄託

福原信三(ふくはら しんぞう)

1883 (明治 16) -1948 (昭和 23)

東京都生まれ。資生堂(当時薬局)の創立者、福原有信の三男。幼少時代から日本画や洋画を学び、画家を志すが、家業を継ぐため、1903年、千葉医学専門学校薬学科(現・千葉大学)に入学。写真は中学時代から始め、東洋写真会に入会。08年にはアメリカ、コロンビア大学に留学し、薬学を学ぶ。その帰路の13(大正 2)年に訪れたパリで留学中の画家・藤田嗣治等と交流を深める。帰国後は2代目として経営に携わる一方、21年、弟の福原路草らと共に写真芸術社を結成して雑誌『写真芸術』を創刊。国内外の写真や絵画を紹介する。パリで撮影した写真を、22年『巴里とセイヌ』として同社より出版。23年に同社より出版した『光と其諧調』では、写真において光の諧調を重要視する考え方を示し、新しい表現を模索していた写真家達に多大な影響を与える。関東大震災で被災し『写真芸術』を廃刊。24年には日本写真会を結成し、会長を務め、31年『西湖風景』35年『松江風景』を同会より出版。39(昭和 14)年には国画会に写真部を創設するなど、写真芸術の確立に努めた。



福原信三「西湖風景」より 1931年
日本大学芸術学部蔵



福原路草「はるな、天神峠」1939年 東京都写真美術館蔵

福原路草(ふくはら ろそう)

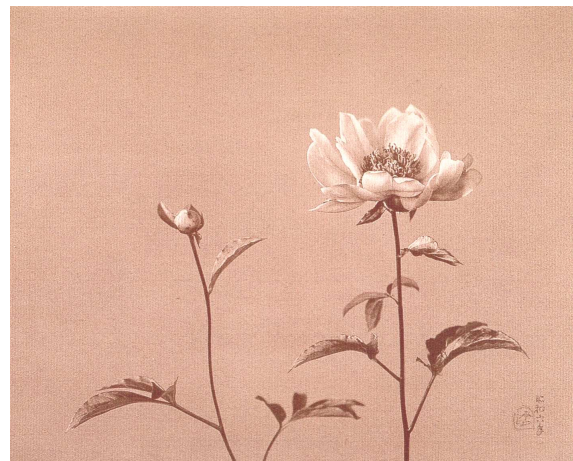
1892 (明治 25) -1946 (昭和 21)

東京生まれ。本名、信辰。資生堂創立者の四男で、福原信三は兄。1917(大正 6)年、慶應義塾大学文学部仏文科を卒業。21年、信三や音楽評論家の大田黒元雄らとともに「写真芸術社」を設立。同年、大田黒と京都へ撮影旅行した頃から写真に本格的に取り組むようになる。22年6月、渡欧。ロンドンでは、写真家 E.O.ホッペのスタジオを訪ねる。同年12月帰国。翌23年3月、ホッペや英国王立写真協会等を通じて収集した写真を中心に、写真芸術社主催「巨匠写真展覧会」(資生堂陳列場)を開催する。24年、「日本写真会」の結成に参画。35年、初の個展を資生堂ギャラリーで開催した。以後、37、39年に同ギャラリーで個展を開催。得意とした風景写真は、信三が唱えた「光と其諧調」の精神を踏襲しつつ、自然に対する鋭い洞察力と斬新かつモダンな感覚を備え、独自の近代的美意識が認められる。

梅阪鶯里(うめさか おうり)

1900 (明治 33) 年-1965 (昭和 40)

大阪市生まれ。本名は梅吉。1917(大正 6)年、明星中学校(現・明星高校)を卒業し、家業の株式仲買業の手伝いを始める。その頃から写真を撮り始め、アマチュア写真団体の「虹影倶楽部」に入会。20年、「浪華写真倶楽部」に入会。はじめはプロムオイル印画の作品で頭角を現すが、23年頃からゴム印画の研究に没頭し、注目される。同年、梶原啓文、米谷紅浪、福森白洋といった浪華写真倶楽部の活動的なメンバーが22年に組織した「天弓会」の同人に推される。26年に開催された第1回日本写真美術展に第1部第1科に出品し



梅阪鶯里「芍薬」1931年 東京都写真美術館寄託

た《夜網》が推薦となる。28（昭和 3）年、安井仲治、米谷紅浪、望月芦都と共に「銀鈴社」を結成し、30年までに3回の銀鈴社展を開催する。その後も国際写真サロンなど数多くの公募展で入選、入賞を果たす。非常にていねいに精緻につくられたゴム印画による作品は、自然の風景や植物をテーマとするものが多いが、それらは日本画的な空間意識と美意識をもちながらも近代的な感性にあふれた表現をもっている。戦後は関西のアマチュア写真団体の指導者として長く活躍した。

高山正隆(たかやま・まさたか)

1895（明治 28）-1981（昭和 56）

東京都生まれ。早稲田大学在学中から美術や音楽を愛好し、中退後は写真に没頭する。23（大正 12）年頃から南実、中嶋謙吉が主宰する『芸術写真研究』や高桑勝雄主宰の『カメラ』などの写真雑誌に作品を発表。当時、イーストマン・コダック社から発売されていた「ベス単」カメラを愛用し、この単玉レンズ・カメラのレンズフードを外し、絞りを開放することによって生じる柔らかなボケ味を好んだ。この「ベス単フード外し」の技法は、多くの写真家に受け入れられ、後に「ベス単派」と称される。26年、「アルス芸術写真画集第一編」として『高山正隆写真画集』が刊行され、そのポートレートや静物をモチーフとした作品に見られる洗練された感性と緻密な画面構成が高く評価され、作家としての地位を確立した。ソフト・フォーカス、メディウム・オイルや油絵具を使用する「雑巾がけ」と称されたレタッチ、引き伸



高山正隆「楽器を持つ女」1924年
東京都写真美術館寄託

びしの際に印画紙を歪曲させるデフォルマシオンなどの技法を駆使した絵画的な作品からは、繊細な美意識と抒情性が感じられる。戦前の日本における「芸術写真」を代表する作家の一人として、数々の写真技法書や入門書も著している。

田村 榮(たむら さかえ)

1906（明治 39）-1987（昭和 62）

滋賀県生まれ。父の影響を受けて写真に興味を持ち、中学時代より「アサヒグラフ」などの写真雑誌を愛読する。1924（大正 13）年東京写真専門学校（現・東京工芸大学）に入学。卒業後の28年オリエンタル写真工業（現・サイバーグラフィックス）に入社。宣伝部を経て、同社のアマチュア向け写真雑誌「フォトタイムス」の編集に携わり、中嶋謙吉の「芸術写真研究」を中心とするベス単派や、淵上白陽の日本光画芸術協会、またそれを引き継ぐ山本牧彦、真継不二夫らの日本光画協会のメンバーたちと交流を持った。5年秋に結成された新興写真研究会では幹事として仲間たちと近代写真の新しい動向について研究するなど、昭和初期の写真界の中心人物であった。抒情性あふれる女性像の作品などを制作し高い評価を得る一方、「フォトタイムス」誌上では技術解説のみならず新しい写真芸術のあり方をめぐって健筆をふるった。著書に「静物写真の写し方」「作画の第一歩」などがある。

<古典的なピグメント印画法とは？>

本展に出品される作品の多くは、写真の技法のひとつである「ピグメント印画法」によって制作されています。ピグメント印画法とは、その名の通り「顔料」を使い画像を作る方法です。よく知られている銀の化合物によって画像が作られる写真（ゼラチン・シルバー・プリントなど）と違い、ピクトリアリズムの特徴である、独特のやわらかさと美しさを作り出すことができます。この技法を使い、日本人の写真家たちは、日本人ならではの繊細な表現を生み出していきました。

主な古典的なピグメント印画法の解説

カーボン印画 Carbon print

この技法が多く使用された時期：1870年代～1920年代

アルフォンス・ポワトヴァン（仏）が、1855年にゼラチンやアラビアゴムなどが重クロム酸カリウムなどの薬品と混ぜると光に感じる性質（感光したところが硬くなる）をもつという原理を発見し、カーボン印画法、ゴム印画法、オイル印画法などのピグメント印画法のもとになりました。カーボン印画法は、ジョセフ・W.スワン（英）が、1864年に考案しました。顔料をゼラチン溶液に混ぜ、それを紙に厚く塗ります。乾かした後、重クロム酸カリウムの溶液で感光性を与え、ネガを密着させて、太陽の光で焼き付け、温湯で現像します。

ゴム印画 Gum-bichromate print

この技法が多く使用された時期：1860年代～1920年代

ポワトヴァンが発見した原理にもとづき、19世紀末にアルフレッド・マスケル（英）やロベール・ドマシー（仏）らによって改良され、ピクトリアリズムの芸術写真の代表的な印画法として広く使われました。アラビアゴムと顔料と重クロム酸カリを混ぜた溶液を水彩用紙などに薄く塗り、乾かします。ネガを密着して太陽の光で焼き付けた後、冷水で現像します。この過程を何度も繰り返して、画像をコントロールして求める調子を作りだしてゆきます。

ブロムオイル印画 Bromoil print

この技法が多く使用された時期：1910年代～1930年代

E.J.ウォール（英）が1907年に原理を発見し、C.W.パイパー（英）が同年に完成しました。普通に引き伸ばしたゼラチン・シルバー・プリントは金属銀で画像ができています。それを、銀のある部分のゼラチンは硬く、そうでない部分は水を含むようにする薬品をつかって脱銀漂白をします。そこに油性インク（油絵具など）を刷毛をつかって叩きつけると、水と油の反発作用によって画像が現れてきます。日本のピクトリアリズムの芸術写真家たちは盛んにこの技法を使って作品を制作しています。

<図録のご案内>

本展覧会の展覧会カタログを発行いたします。主な出品作品と作品解説、作家解説、関連年表および、担当学芸員と日本のピクトリアリズムの研究者によるテキストを掲載します。

『芸術写真の精華 日本のピクトリアリズム 珠玉の名品展』

(価格未定、2011年3月8日発行予定)

※当館ミュージアムショップ (03-3280-3279) にて発売します

<関連イベントのご案内>

●特別講演会「日本の芸術写真」(仮題)

出演者 竹葉丈 (名古屋市美術館 学芸員)

蔦谷典子 (島根県立美術館 学芸員)

堀宜雄 (福島県立美術館 学芸員)

光田由里 (渋谷区松濤美術館 学芸員)

金子隆一 (東京都写真美術館 専門調査員)

日時 4月16日(土) 午後6時半～午後8時半

会場 1階ホール

対象 展覧会チケットをお持ちの方

定員 190名

受付 当日午前10時より当館1階受付にて整理番号付入場券を配布します。

●ワークショップ「雑巾がけ」を学ぶ」

「雑巾がけ」とは、主に大正時代に行われていた油彩絵具を使用する日本独自のピグメント印画法です。

講師 比田井一良 (銀遊堂 プリンター)

日時 4月23日(土) 午前10時～午後6時

会場 1階創作室 (アトリエ)

対象 銀塩写真の専門技術をお持ちの方

定員 11名 (申込者多数の場合は抽選)

参加費 5,000円

申込み メールまたはファックスのいずれかで、講座名、申込者の郵便番号、住所、氏名、連絡先 (ファックスの場合はファックス番号) をご記入の上、下記までお送りください。※申込み締切り：4月8日(金)

東京都写真美術館ワークショップ係

メールアドレス workshop@syabi.com

ファックス 03-3280-0033

●フロアレクチャー

会期中の第1・第3金曜午後4時より、担当学芸員による展示解説を行います。

<ご利用案内>

- 展覧会名 芸術写真の精華
日本のピクトリアリズム 珠玉の名品展
Masterpieces of Japanese Pictorial Photography
- 開催期間 平成23年3月8日(火)～5月8日(日)
- 主催 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
- 助成 財団法人朝日新聞文化財団
- 協賛 資生堂／凸版印刷／東京都写真美術館支援会員
- 観覧料 一般 800(640)円／学生 700(560)円／中高生・65歳以上 600(480)
※()は20名以上団体料金および東京都写真美術館友の会会員料金
※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料
※第3水曜日は65歳以上無料
- 会場 東京都写真美術館 3階展示室 電話：03(3280)0099
〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
- 開館時間 10:00～18:00 (木・金は20:00 入館は閉館の30分前)
- 休館日 毎週月曜日 (月曜日が祝日の場合は翌火曜日)、
- 交通機関 JR 恵比寿駅東口より徒歩7分
東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩10分
当館には専用の駐車場がございません。お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用ください。

<お問い合わせ>

- 東京都写真美術館 事業企画課
電話：03(3280)0034 FAX：03(3280)0033
- 展示担当 金子 隆一 r.keneko@syabi.com
藤村 里美 s.fujimura@syabi.com
- 広報担当 久代 明子 a.kushiro@syabi.com
前原 貴子 t.maehara@syabi.com

リリースに掲載されている図版のデータを、プレス掲載用にご用意しています。
ご希望の方は上記広報担当までお問い合わせください。